

府民会議メンバーによる鴨川に係る意見発表

(事前に提出いただいたもの)

鴨川府民会議意見

土居好江

- テーマ 1、鴨川プロジェクトの創設
2、鴨川を通した地域間外交と国際交流
3、「川の駅」構想について

提言したい意見

1、鴨川プロジェクト、

鴨川プロジェクトとは、川から京都の歴史や文化を知り、都市の中心を流れる川の恵みを再認識して環境問題の切り口とするプロジェクトである。

イギリスが21世紀に初めに次の千年を考える環境問題のエデンプロジェクトを創設したように、鴨川から川と自然と人との共生を考えるプロジェクトとして、粘土質のドームでできているエデンプロジェクトを、ウォーターフロントの視点から京都メソッドとして、水の環境問題を考えるプロジェクトとしたい。

鴨川の川床や河川公園、川辺の文化史等、京都の鴨川の文化をイギリスのエデンプロジェクトで発信し、川と都市の共生を展示して、エデンプロジェクトをも発信基地としていくことを提案したい。

またエデンプロジェクト側も京都とのコラボを希望しており、鴨川プロジェクトとしてコラボが検討できないかをご提案したい。災害も多くなっている現在、ウォーターフロントの鴨川プロジェクトを早急に立ち上げて、世界、日本の川等と連携を取ることを提案したい。

2、鴨川を通した市民や地域間外交と国際交流の推進

都市の中を流れる川がある都市との連携で、水辺環境の向上や憩いの市民川広場として、川の文化、歴史、環境問題、川と自然等々の問題解決の糸口を探る意見交換と連携をはかり、川の持つ意味を問い直す機会としたい。もちろん専門家や川に関わる関係者とも交流を目指したい。

3、「川の駅」構想について

道の駅は、地産地消や郷土名産の売り場と休憩場として存在するが、川の駅は、公園の休憩場として、公衆トイレも併設して更に市民が鴨川に親しみやすい環境づくりを提案したい。

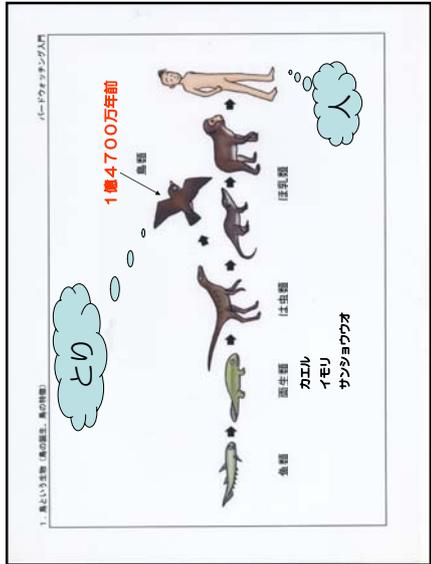


Eden Project is...

- An educational charity (教育チャリティー)
- An international visitor destination (国際観光アトラクション)
- A project trying out new ideas and new ways of thinking
(新しいアイデアやものの考え方を試すプロジェクト)
- Not a traditional botanic garden at all!
(伝統的な植物園と一緒にしないでください！！)

鴨川/府民会議

2008・9・1 / 中村桂子 (日本野鳥の会)



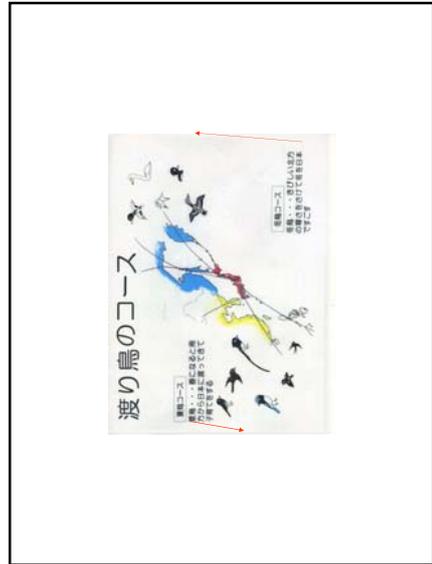
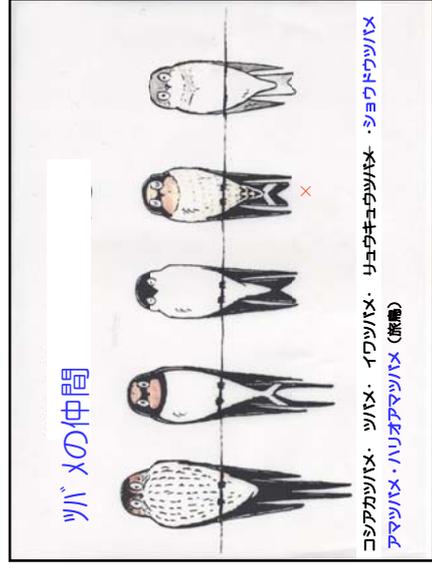
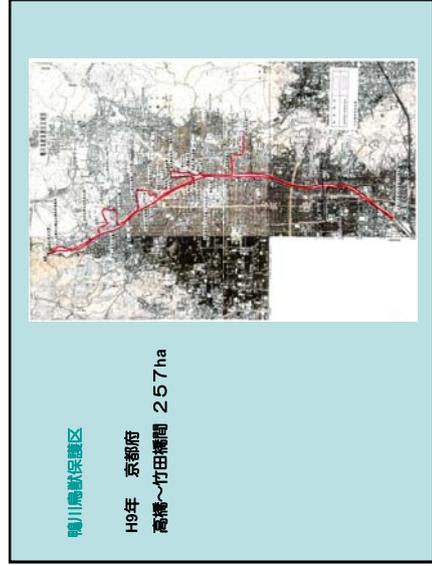
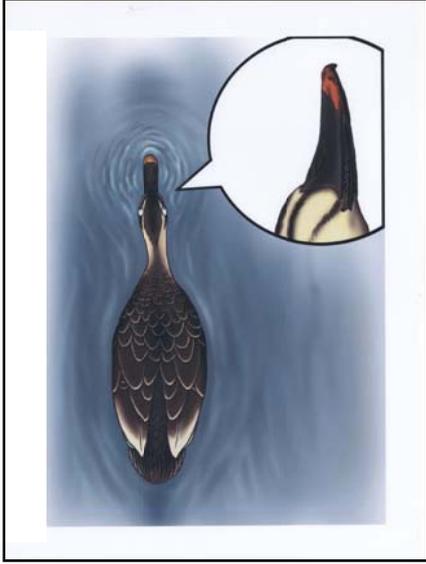
野鳥って何？

- ①飼鳥：インコ、文鳥など
- ②野鳥：カモ、ツバメなど

鳥獣保護法で守られている

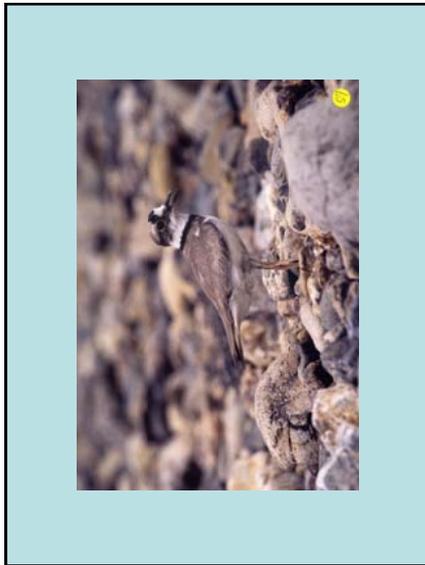
最新情報

地球上には9900種の野鳥が生息
 日本・・・542種 (2000年現在)
 鴨川では？・・・10年間で約119種を観察





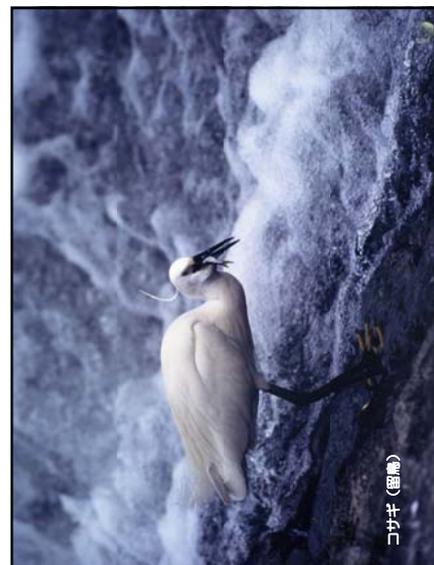
カルガモ (留鳥)



カイツブリ (留鳥)



中洲に関すること



コサギ (留鳥)



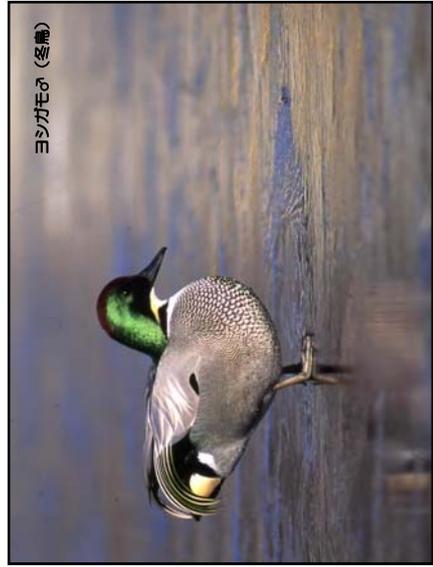
ヒドリガモ (冬鳥)



ミコアイサ (冬鳥)



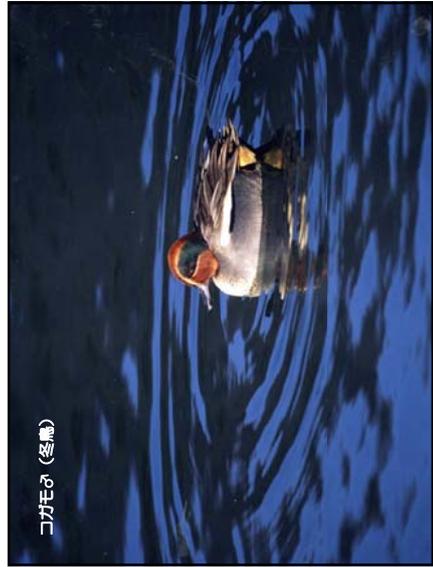
ハンビロガモ (冬鳥)



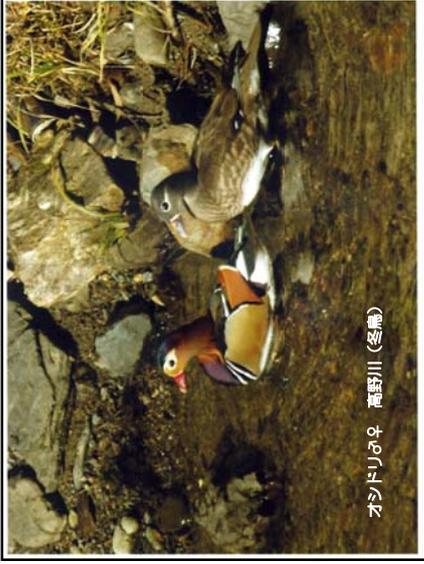
ヨシガモ (冬鳥)



オナガガモ (冬鳥)



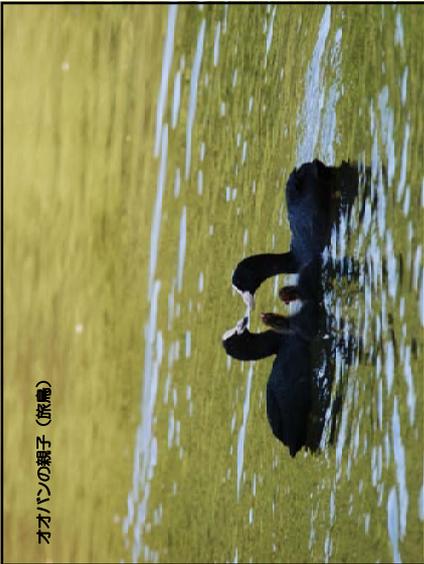
コガモ (冬鳥)



オンドリひめ 高野川 (冬鳥)



バン (留鳥)



オオバンの親子 (旅鳥)



ハマシギ (冬鳥)

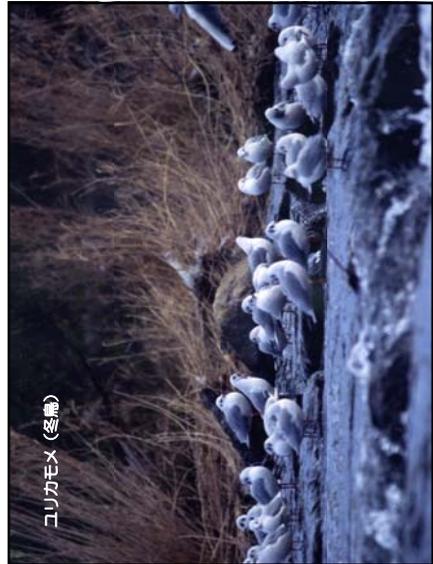
伊勢物語・万葉集

コリカモメ

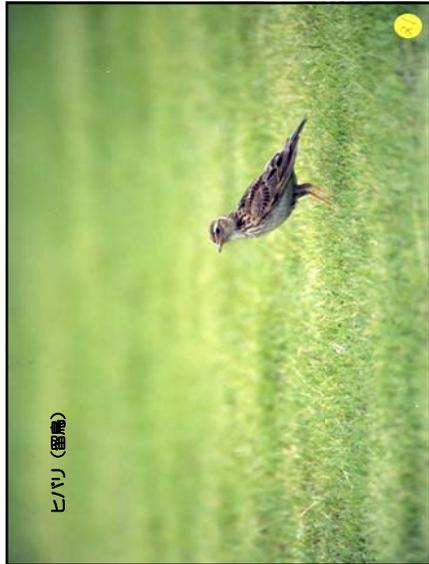
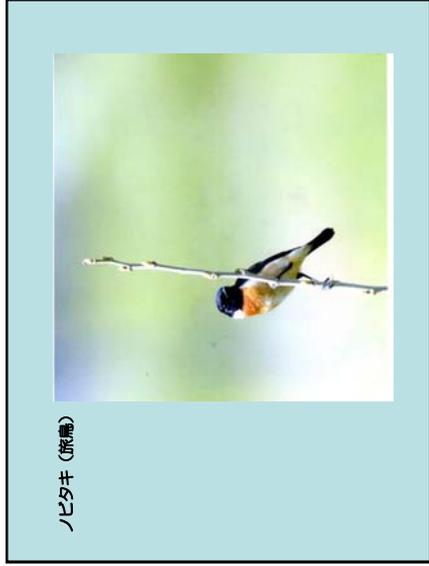
記録：1973年に数十羽

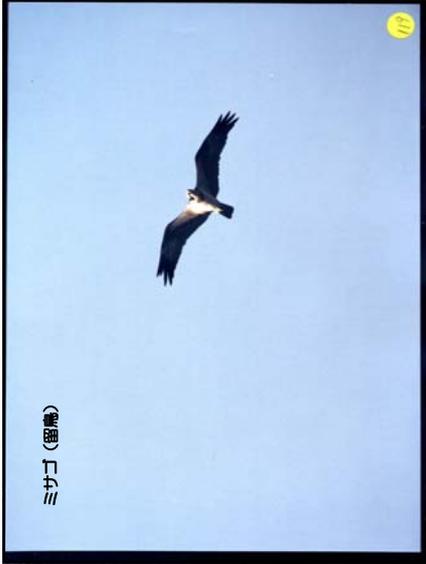
ミヤコドリ

- ・白い鳥
- ・嘴が赤い
- ・足が赤い
- ・水に浮いて鳴く
- ・魚を食へる
- ・群れて鳴き遊ぶ



コリカモメ (冬鳥)





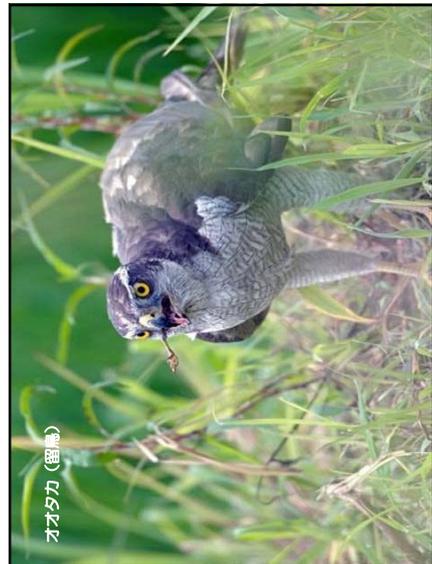
ミサゴ (留鳥)



トビ (留鳥)



イソシギ (留鳥)



オオタカ (留鳥)

ありがとうございました

水鳥危機

世界の群れが削減

日本のみぎぞり類も

環境省が発表した「水鳥の現状と将来展望」によると、世界の水鳥の総数は過去数十年間で約30%減少したと推定されている。この減少は、生息地の破壊、気候変動による干ばつや洪水の増加、そして農薬の使用などが主な原因とされている。日本でも、ミサジロやアオサギなどのみぎぞり類の数が減少していることが報告されている。

環境省は、水鳥の生息地を保護し、繁殖地を増やすための取り組みを進めている。また、市民による水鳥観察の促進や、水鳥保護のためのボランティア活動の呼びかけも行っている。

意見発表資料

2009.9.1

氏名	西村 淳暉
テーマ	<p>(1) 「鴨川のさくら」の保全とさくら並木の新設について</p> <p>(2) 「鴨川 文化・博物研究センター」の設置について</p> <p>(3) 住民が参画する「自然文化遺産の開発」に向かって (各種団体・学校・地域と行政との協同)</p>
提言 したい 意見	<p>(1) 「鴨川のさくら」の保全とさくら並木の新設について</p> <p>鴨川流域の主たるさくら名所のうち中流域では、近年、整備されてきているが、上流域の「しはん桜」(葵橋以北)や「なからぎのベニシダレ」(北大路橋北)は、昨今衰弱してきている。後継樹の植樹(既存の並木との併行列植)や土壌の改良が必要と思われる。</p> <p>一方、特に、上流域でのさくら並木の新設により、鴨川さくら名所の復活と新展開で、府民や県外の人々へのすばらしい鑑賞の機会提供とともに、開花シーズン以外にも新緑・紅葉風景や緑陰、憩いの場の提供により、鴨川さらには京都ファンづくりの展開が期待できるであろう。</p> <p>具体的対策としては、現在のさくら並木の空白地帯それぞれにソメイヨシノ一種類の増植、もしくは開花時期の異なる品種を列植することを提案したい。(たとえば、カンザン・ゾーン、ショウゲツ・ゾーン、コヒガンザクラ・ゾーン等) こうして鴨川堤防は、1か月にわたってさくら開花風景が鑑賞できるであろう。</p> <p>(現行「鴨川公園」を「鴨川自然公園」に名称変更も検討)</p> <p>(2) 「鴨川 文化・博物研究センター」の設置について</p> <p>鴨川は、歴史的経過からも、京都の人々とのかかわりは誠に多岐にわたり文化発展への寄与は大である一方、時に公害や自然災害を発生せしめる存在でもある。</p> <p>鴨川の過去をふりかえり将来を見据えると、現在、鴨川にかかわる研究課題が山積しているといえよう。たとえば、景観問題、災害研究対策、自然環境破壊、森林生態系・水質、地球温暖化の影響、あるいはそれらの情報発信、住民との連携等である。時代を超えた歴史研究も重要である。</p> <p>このような課題をセンターといった包括機関によって、総合的、個別的に情報収集・研究を重ねて、関係機関に発信して漸進的なその発展を期待したいところである。あわせて情報公開や展示コーナーの設置により住民意識の高揚や生涯学習の場としても活用できよう。</p>

(3) 住民が参画する「自然文化遺産の開発」に向かって
(各種団体・学校・地域と行政との協同)

鴨川は、京都にとってのみならず日本を代表する河川としての存在は重要である。

鴨川にかかわる各種団体の協議会機関等によりそれぞれの団体の基本理念を尊重しつつ組織的な整合性ある鴨川関係の施策展開が望まれる。

また、日常報道される「かもがわ美化運動」「かもがわ自然観察」「かもがわウオーキング」といった学校関係、地域自治組織、ボランティア等の活動がさらに組織的に発展されることが期待され、さらに住民個々人が「川」さらに「山」にもおおいに関心をもって、それらを慈しみ育てたいものである。

このような住民の地道な行動と行政による政策・プロジェクトそれぞれ相乗効果の継続により、鴨川を後世にすばらしい財産として残したいものである。

将来の「世界（自然・文化）遺産登録」を視野に入れ、今すぐにでも公民共通認識の行動展開が図れればと考えるところである。

【付】 鴨川公園の歴史文化回遊ルート

- 公園の起点、丸太町橋のほとり、頼山陽の書齋「山紫水明処」から東山連峰を眺めて北進、緑陰に親しみ、賀茂大橋からは「山」と「川」、いいかえれば自然と人為文化のすばらしい融合風景を眺める。
- 世界遺産「下鴨神社」、糺の森に立寄り、出雲路橋へ。府下第1位の眺望である。(府アンケート)
しはん桜を観て、北大路橋南（西）からは秀麗な比叡山。
- 植物園を経て、なからぎのベニシダレ。五山の船山が望める。世界遺産「上賀茂神社」の静謐な社と森、御園橋を渡ってUターン。改めて比叡山を主峰とする東山連峰と賀茂川を眺め続ける。

(どの部分を切り取っても、優れた回遊ルートである。)

- 課題
1. 上賀茂神社・下鴨神社・植物園それぞれと鴨川公園とのアクセス、参道への通路の整備開発
 2. 景観上、建築物の外観（賀茂大橋からなど）
 3. 橋の整備（北大路橋は先般、補修済み）
 4. 中州、寄州の圧縮と並木・植栽の育成

鴨川府民会議・議題提案

平成21年9月1日

■ 氏 名 細 田 茂 樹

■ テーマ 「鴨川自然公園への発想転換」

鴨川河川敷の行き過ぎた人工庭園化（都市公園化）を危惧し、「鴨川自然公園」への発想の転換を提言します。

■ 提言したい意見

京都という大都市を貫流している清流「鴨川」、緑したたる北山山地の大自然を水源として遙か太古よりこの山城盆地を滔々と流れています。

しかし、山紫水明の地とうたわれてきて、京都の自然景観を代表しているとも言ふべきこの鴨川も、一方では暴れ川としての側面をも持ち合わせており、氾濫する事により過去幾多の自然災害をもたらしています。

このように、大都市を流れ京都市民の素晴らしい憩いの場所としての「清流・鴨川」、そして放置すれば必ず災害をもたらす「暴れ川としての鴨川」。この二つの側面を持つ鴨川のあるべき姿を模索しているのが、この「鴨川府民会議」の基本テーマであると認識しています。

この二つの側面を考える過程において、鴨川河川敷を、或いは鴨川そのものを「都市公園化」という考え方があります。

そして、この鴨川と鴨川河川敷を「都市公園化」という発想は、現実として着々と進みつつあります。

この事については、河川敷の有効利用、及び、防災対策という側面からも当然肯定されるべきと思いますし、その事自体には何の異論もありません。

しかし、現実問題としての河川敷整備の進捗状況を検証してみる時、余りにも人間の手が入り過ぎた「人工庭園」となっている事に危惧を覚えます。もちろん、防災という観点から、そして市民の憩いの場所としての公園として整備する事に関しては全く異論をはさむ余地が無いとはいうものの、鴨川という大自然に対する必要以上の「人工庭園化」には少し抵抗を感じます。

歴史の都である京都を流れる市民の憩いの場所としての鴨川の、今後の千年、そして二千年を考える時、「鴨川の都市公園化」は肯定されるとはいうものの、こわしてしまっただけではもう二度と戻ってこないであろう「鴨川のすばらしい自然」は最大限に残すべきと考えます。

極論かも知れませんが、あの自然に満ち溢れた鴨川が、グラウンドと芝生のみ都市公園にもなりかねない現状を憂えます。

従って、今後、河川敷の整備・公園化をはかりつつも、「無機質な人工庭園」ではなく、もっともっとかけがえのない鴨川の自然を残し、一度はこわしてしまっただけかも知れない鴨川河川敷の自然も出来る限り再生し、鴨川の素晴らしい自然と、そして癒しを求めての人間が調和する「鴨川自然公園」という発想を、改めて模索すべきと考えます。

その為には、現在の鴨川、そして鴨川河川敷を再度細部に渡って実地検証する事により、残すべき鴨川の自然を最大限に活用、或いは人間が消してしまった自然を再生し、人間の憩いと鴨川の自然が正しく調和・融合した、「鴨川都市公園」ではない、真の意味での「鴨川自然公園」を作るべく、今こそ大きく発想の転換をはかるべきと考えます。これこそ、現代に生きる我々が、千年後の京都市民に胸を張って贈ることの出来る、「自然遺産・鴨川」そのものではないでしょうか。

以 上

提 言

2009年09月01日(火)

氏名 堀 正勝

テーマ 京都 鴨(賀茂)川の「山紫水明」の景観を世界遺産へ

提言したい意見

緑のトンネルの賀茂街道からの鴨(賀茂)川と北山から比叡山、東山への山々の心地好い景観はまさに山紫水明の景観です。山紫水明の心地好い土地と云う事で選ばれた平安京の地、その創建時の山紫水明の景観を今だ色濃く残している様に思える貴重な景観です。京都とその文化、建物等はその山紫水明の景観の薫陶を受けて育まれて来たものです。鴨(賀茂)川の山紫水明の景観は 金閣寺、清水寺、上賀茂神社、下鴨神社等、京都の世界遺産の原点です。賀茂街道からの鴨(賀茂)川と北山～東山への山々の心地好い景観も世界遺産たるべきと思います。世界遺産たるべく、広大な緑のエリアの植物園と一体的に、賀茂街道の緑(乃至は桜の季節は桜)のトンネルを拡張整備し、堆積した土砂を撤去し、鴨(賀茂)川を水明の流れとし、河川敷や堤防上を歩いて山紫水明の景観を心地好く愉しめる様に整備、嵐山の渡月橋以上に京都を味わい愉しめ癒される山紫水明の観光の地と出来たらと思います。

従来京都観光は嵐山、嵯峨、金閣寺、銀閣寺、清水寺等の観光地をバスや車でまわり、食事は祇園や東山等の有名京料理店で高級京料理を食すと云う、運動不足に、食べ過ぎと体に良くない観光でした。鴨(賀茂)街道から愉しむ山紫水明の観光は緑(桜の時期は桜)の植物園を拠点とし、賀茂街道を上流へ、又は下流へと車を使わず、歩いて、ゆっくり山紫水明の心地好さを愉しみ、お腹が空いたら、賀茂の採れ立て野菜を使ったヘルシ料理を味わう、地球に優しいエコで、心と体をリフレッシュさせる新しい観光で、何度も京都観光を愉むファンを増やし、観光収入を増やし、景観と環境の保全も無理なく出来る様にしたい。

昨年、鴨(賀茂)川の源流域の調査をさせて頂き、源流域の山が荒れて、土砂が流されてか、木が多く倒れていた事と雲が畑の源流域の川沿いに産業廃棄物の置場があり、雨などでは汚染水が地中から川にしみ出したり、溢れて川に流れ込んだりし、鴨(賀茂)川が上流で汚染されている危険性が高いと危惧された事が今も気になっています。山が荒れて、土砂が流されると、下流に土砂がたまり、川底が上り、水害の危険性が増します。中州等と云ってられない状況です。今回の兵庫県佐用町の洪水は1000年に一度の大雨が原因(?)と云われていますが、流されて来て堆積した土砂を放置した事が被害を今回の様に大きくした原因です。堤防の整備は時間と費用は掛かるとは思いますが、堆積した土砂の撤去は費用も時間も掛かりません。堆積した土砂の撤去は万全の対策ではありませんが、必要不可欠な対処です。早急に実施されるべきと思います。上流域の産業廃棄物置き場等は(大)雨で汚染水を川に流れ込ますと人命にかかわる問題になると危険性があるので、源・上流域の川沿いの産業廃棄物置場や建設資材置場等の設置を早急に禁止する必要があると思います。100年に一度や1000年に一度が珍しくない昨今です。出来る対策から早急に実施して頂きたい。

その源流域の山が荒れたのは、都市に住む我々が 薪を使っていた風呂等を便利だと云ってガスや電気に換え、薪を使わないライフスタイルになったのが原因です。山は10本の苗木を植えても、9本を間伐し、山の手入れを続けて、30～50年後にやっと1本の木が売れる材木となる。9本の間伐材は薪や炭として売っていたので、林業が成り立っていた。その薪や炭が使われなくなって売れないので、1本の材木が高くせざるを得なくなり、更に売れなくなる悪循環で、林業が廃れて、山の手入れがされず、山が荒れると、露出した山肌の土が流出し、根が露出し倒木が多くなり、水が地中に保水されず、地表の汚物と共に山肌を流れ、川が汚れ、雨が降るとすぐ増水になる。山と川の再生には、林業の復活させ、山を再生させるしかありません。林業を復活させる為に、間伐材を燃料として利用する新しい方法をとる必要がある。その一つが間伐材をチップ化し、小規模な火力発電を山の近くで行い、都市へ送電し、行政も環境保全の一環としてサポートし、都市住民がその電気を高くても優先的に購入して使えるシステムを確立する事を実現する必要があると思います。